

# びわこの 考湖学

—第3部—

12

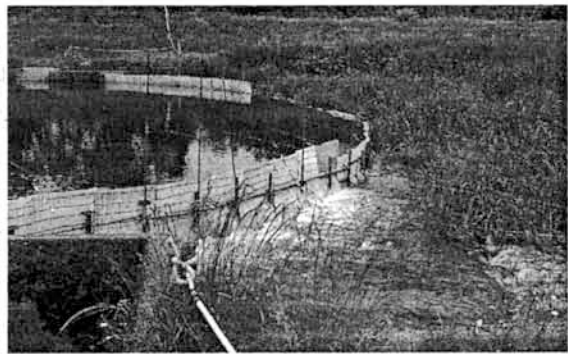
琵琶湖に注ぎ込む多数の河川。これらの川には、季節ごとに様々な魚たちが琵琶湖から遡上してきます。春の鮎に始まり、夏のハス、秋のピワマスがその代表でしょう。これらの河川では遡上する魚を対象とした築漁が盛んです。

築漁という、川をくぐる鮎を簀で受ける、降り築がイメージされますが、琵琶湖の場合は逆に川を遡る魚を捕る「のぼり築」が中心となっています。かつては、河川ごとに独特の形をした、のぼり築が操漁されていましたが、河川改修などで環境が変化し、次々に簀を消してしまいました。その中であって、湖西の安曇川南流・北流、石田川、知内川の各河川では、現在も

盛んに築漁が行われています。

湖西の河川で行われている築漁は、小鮎を対象とした、カトリヤナと呼ばれるもので、川の流れにアーチ状杭を打ち、ここに簀を張って水を堰き止め、水流を川の左右に分け、水流を遡る小鮎を横につくった池に落とし込んで捕る仕組みです。川に流す水量と、池に流す水量の分水がポイントで、ウケケチと呼ばれるこの部分の構造が漁の成果を左右します。カトリヤナは、川を完全に遮断しますの

## な 築



知内川の築

で、条件さえ良ければ、遡上する小鮎をすべて捕ることも可能です。しかし、川を遮断するということは、大水が出ると、ここに上流から流れてくる流木などが激突し、築を

壊してしまうことになりま  
す。そのため、雨が降ると水  
が増水する前に築の簀を外し  
てしまいます。魚達はこの間、  
自由に上流にのぼることがで  
きます。現在は、各河川に一  
棟しか築はありませんが、例  
えば野洲川のように何棟もの  
築がかかれていた時代があ  
りました。当時の築は、完全  
に川を遮断することはなかつ  
たようですが、魚は下流から  
来ますので、下流の築が一番  
有利です。このため、上流の  
築と、下流の築の間の争論の  
記録が多数残されています。

安曇川は、湖西最大の河川  
で、上流の朽木谷は木材の山  
地として古来有名でした。朽  
木で切り出された木材は、筏  
に組まれて川を降り、さらに  
琵琶湖を流して出荷されまし

た。築は川の downstream にあります。筏は上流から降ります。当然、築が邪魔になりますので、ここでまた争論が起きます。この解決策として、築の中央には「イカタトオシ」と呼ばれる低い簀を張った部分が設けられています。筏ながしが行われない現在にあっても、この名残を見ることができま

す。  
築で捕られた小鮎は、かつては遠く台湾、北海道まで、友釣り用のアユとして全国に向けて出荷されてきました。活魚運送技術が発達だった時代、アユを活かして目的地に運ぶため、漁師さんたちがトラックや貨車に乗り込み、不眠不休でアユの入った桶の水を柄杓でかき混ぜ、空気を補給し、氷を入れて水温を保ち運んだそうです。琵琶湖のアユが、全国を制覇していた時代があったのです。

(財団法人滋賀県文化財保護協会 大沼芳幸)

# 全国の友釣り支えた